

新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（前編）

首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010

Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 1): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009-2010

水野 剛也・福田 朋実

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

はじめに 本論文の概要

本論文は、鳩山由紀夫首相の在任期間中（2009年9月16日～2010年6月8日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本号に掲載する前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰する。

首相を描いた作品の質的分析は、本誌次号（第50巻・第2号）に掲載する予定の中編から開始する。中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）を扱う。

さらにその次の号（第51巻・第1号）に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

政治・政治家を論評する上で、漫画は古くから主要な表現手段でありつづけてきた。政治漫画研究者の茨木正治によれば、政治漫画の嚆矢は、少なくとも15世紀末から16世紀のイギリスで発行された、宗教改革に関する1枚のパンフレットにさかのぼるといふ。¹

政治漫画は、そのときどきの政情を題材とするため時事性が強く、それゆえ日々の出来事を報道する新聞とともに発展してきた。たとえば、アメリカでは植民地時代から現在まで、程度の差はあれ、政治漫画は新聞報道に不可欠な要素でありつづけている。アメリカのジャーナリズム界でもっとも権威があるとされるピューリッツアー賞には、早くも1922年に政治風刺漫画（Editorial Cartooning）部門が

設けられ、同部門は21世紀に入っても存続している。日本でも、新聞が誕生した幕末の黎明期から現在にいたるまで、新聞紙面のなかで漫画はつねに一定の地位を占めてきた。時代や国を越えて、政治・政治家と漫画、そして新聞は切っても切れない密接な関係にある。²

ところで、世界的に見ても独自性が強い日本の新聞4コマ漫画は、政治・政治家をどのように描いているのであろうか。上述のとおり、日本の新聞も創成期から積極的に漫画を掲載してきたが、なかでも4コマ漫画は他国の新聞漫画と比較してユニークな存在である。どのようなニュースが起きようとも、ほぼ毎日必ず最終社会面の左上隅に掲載される4コマ漫画は、日本のほとんどの一般紙にとって「そこになくってはならない」ものであり、多くの読者にとっては読む・見ることが習慣づけられた定番アイテムである。漫画史研究者の清水勲も指摘しているように、「日本の四コマ漫画は新聞を中心に発展してきた」。しかし、その人気・認知度の高さにもかかわらず、新聞4コマ漫画の内容を実証的・体系的に分析した学術研究はきわめて少ない。その政治的内容に光をあてた研究は、なおさら少ない。³

本論文は、これまでほとんど研究対象とされてこなかった新聞4コマ漫画に目をむけ、かつ、そのなかで日本の最高政治指導者である内閣総理大臣（以後、首相）がいかにか描かれているかを分析することで、上述の疑問の一端を解明しようとする試みである。

より具体的には、鳩山由紀夫首相の在任期間（2009年9月16日～2010年6月8日＝266日）を時間枠として、3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する。⁴

分析対象とした4コマ漫画の題名・作者名・掲載紙名は、以下のとおりである。^{*}

- ・「アサッテ君」 東海林さだお 『毎日新聞』（朝刊）
- ・「ウチの場合は」 森下裕美 『毎日新聞』（夕刊）
- ・「コボちゃん」 植田まさし 『読売新聞』（朝刊）
- ・「ののちゃん」 いしいひさいち 『朝日新聞』（朝刊）
- ・「地球防衛家のヒトビト」 しりあがり寿 『朝日新聞』（夕刊）

^{*} 『読売新聞』の夕刊では、鳩山首相の在任期間中、社会面の4コマ漫画は連載されていない。それ以前は、小泉純一郎首相の在任期間中の2004年7月2日号で終了するまで、38年間にわたり「サンワリ君」（鈴木義司）が連載されていた。なお、鳩山の退任から約2年4ヵ月後の2012年10月1日号からは「オフィス ケン太」（唐沢なをき）がスタートしている。

分析対象を抽出する上でもっとも重要なのは、「首相を描いている作品」をいかに定義するかであるが、本論文はかなり狭義のそれを採用した。すなわち、「首相を描いている作品」を、次の2つの

基準のいずれか、あるいは両方に合致するものに限定した。

- 1) 鳩山首相の身体、もしくはその一部を、首相本人であることを判別できる画像として描いている。
- 2) 「鳩山」・「首相」・「総理」・「ハト」など、文字により直接的に鳩山首相に言及している。

上述のような狭義の基準を採用した理由は、首相その人が作品の題材として描かれていることが疑いようのない事実として客観的に確認できるもののみを扱うことで、分析対象の抽出（同時に分析から得られる知見）の安定性・確実性を最優先させるためである。もちろん、間接的・示唆的、その他の方法で首相を描いている（と思われる）作品は存在するし、それらに分析価値がないというわけではけっしてない。本論文でも、質的な分析をする際には、定義には合致しないものの首相と関連すると考えられる作品を補足的に分析に加える。しかし、類似した先行研究がきわめて限定されている現段階では、できるだけ狭義の定義を採用することで分析対象の抽出の精度を高め、可能な限り堅実な知見を示し、今後のさらなる研究につなげることが先決であると判断した。小泉純一郎、安倍晋三・福田康夫、および麻生太郎首相を描いた4コマ漫画を分析した先行研究（後注3参照）も、ほぼ同じ定義を採用している。なお、これら一連の先行研究は本論文にとって最重要、かつ他に類のない比較材料であるため、随所で「先行研究」として参照・引用するが、頻繁に言及するためそのつど後注をつけないことを断っておく。

分析にあたっては、これも先行研究にならい、マス・メディアのフレーム（枠組）概念にもとづく分析手法を援用する。ここでいうフレームとは、しばしば引用されるトッド・ギトリン（Todd Gitlin）の定義に従い、「言葉であるか画像であるかを問わず、シンボルの使い手が日常的に言説を構成する際に用いる、認知・解釈・表示の一貫したパターン、また選択・強調・排除の一貫したパターン」をさす。簡潔に言えば、媒体（新聞4コマ漫画）がどのような枠組・とらえ方・観点で対象（首相）を描いているかに着目する質的な分析手法である。ギトリンによれば、あらゆるジャーナリズム活動にとってフレームは不可避・不可欠な存在であり、ゆえにそれを分析するためにはフレームの構造を明らかにする必要がある。⁵

次に、本論文にはいくつか重要な意義があるが、主要なものとして以下の3点をあげることができる。

第1に、新聞の政治漫画を分析した先行研究のほとんどが1コマ漫画のみを対象としてきたのに対し、本論文は4コマ漫画という未開拓に近い領域に踏み込む。既述のとおり、4コマ漫画は日本の新聞界、および漫画界で無視できない人気と地位を誇っている。藤森照信の言葉を借りれば、「マンガファンならずとももっとも多くの人が目を通してはいるのは新聞四コマ漫画にちがいない。日本のマンガの大通りというか広場にあたる」。にもかかわらず、その内容を学術的に分析しようとする努力はほとんどされてこなかった。たとえば、本論文の冒頭で触れた茨木正治は、政治漫画を理論的、かつ

実証的に検討した日本では数少ない研究者であるが、彼の一連の研究は1コマ漫画だけに焦点をあてている。⁶

関連して第2に、ただでさえ少ない新聞4コマ漫画の先行研究のなかでも、政治的な表現内容に着目してそれを実証的・体系的に分析する本論文のような試みは、なおさら希少である。その主因として、ある漫画研究者が指摘しているように、一般的に新聞4コマ漫画が「一種の清涼剤 [として] 読者に息抜きをさせる」ものとしか理解されていない点が考えられる。新聞4コマ漫画を質的に分析している若干の既存文献にしても、小泉から麻生までの首相の描かれ方を解明した先行研究以外は、政治や政治指導者の描かれ方を研究対象としているわけではない。⁷

先行研究の希少性についてさらに付言すれば、本論文は自民党から政権を奪った民主党の初の首相を分析対象としている点で、そもそも少ない関連研究のなかでもことさらに希有な特長を有している。民主党は2009年8月30日に執行された衆議院総選挙で躍進し、念願の政権交代を実現させた。その結果として誕生した鳩山首相の描かれ方を分析する本論文は、これまで自民党の首相ばかり(小泉・安倍・福田・麻生)を扱ってきた既存の研究に対して、有力な比較検討材料を提供することができる。もちろん、本論文を足がかりに鳩山の後継者で同じく民主党の菅直人と野田佳彦、およびそれ以後の首相を取りあげる事例研究がよりいっそう進展すれば、政権交代が新聞4コマ漫画に与えた影響をより長い時間枠で究明することもできよう。

なお、「サザエさん」(『夕刊フクニチ』・『新夕刊』を経て『朝日新聞』、長谷川町子)に関しては例外的に多くの作品論が存在するが、本論文のように政治指導者の描き方に注目しているわけではないし、その多くは学術研究というよりは大衆むけの教養・娯楽書である。既述の点とあわせ、本論文には、既存の新聞4コマ漫画研究が見落としてきた領域を新たに開拓する意義がある。⁸

第3に、本論文には政治的コミュニケーション学の観点からも重要な意義を見いだすことができる。画像と文字を組みあわせることのできる漫画表現には、受け手の政治認識に与える影響やジャーナリズムの権力監視・番犬機能という点で、無視できない特性がある。フェルドマン・オフエル(Feldman Ofer)は、「マンガは、現代国家において、政治的コミュニケーションの重要な役割を担っている。これは読者に昨今の政治社会状況を知らしめると同時に、その状況を雄弁に解説し、国内外の事態についての理解に役立っている」と指摘している。前述の茨木も、政治を扱うことで漫画は「読み手である一般庶民に情報を提供し、あわせて政治権力をつかさどる様子を批判的に表して……政治における認識と態度を形成する一助となる」と論じている。より最近では、アメリカ史研究者の金澤宏明が「民衆に対して政治意識を流布し、賛同あるいは批判を促す媒体」としての政治漫画の史料的价值を評価している。政治認識を形成する機能や権力監視・番犬機能が1コマ漫画だけに認められて、新聞4コマ漫画に認められないと考える根拠はない。本論文は、新聞4コマ漫画の政治的コミュニケーションとしての機能・性質の理解にも貢献することができる。⁹

本論文の構成についても説明しておく。まず、次項「2 量的な側面から見た全体的な傾向」では、分析期間から抽出した作品群を集計し、量的な側面から全体的な傾向を把握する。それをふま

え、「3 新聞4コマ漫画が描く鳩山首相」で作品の質的な内容分析をおこなう。最後の「4 結論分析・知見の総括」では、それまでに得た分析・知見を総括し、先行研究とも比較しながら今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能などについて全体を通して得られる若干の考察を示す。

紙幅制限のため、本論文は前編・中編・後編にわけて掲載する。本号掲載の前編では、「2 量的な側面から見た全体的な傾向」までをまとめる。本誌次号（第50巻・第2号）に掲載する予定の中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）の質的な内容分析をおこなう。さらにその次の号（第51巻・第1号）に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析した上で、結論として分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

最後に、本論文中で言及する人物の役職等はすべて当時のもので、敬称は省略している。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本項では、本論文の主目的である質的な内容分析をおこなう前段階として、鳩山首相を描いた新聞4コマ漫画を量的な側面から見ることで、その全体像を俯瞰する。

知見の記述に移る前に、量的なアプローチをとる本項では、前述した「首相を描いている作品」の定義に合致しない作品や在任期間外に掲載された作品は、すべて除外してあることを断っておく。量的な手法を採用するがゆえに、明確な基準で取捨選択をする必要があるからである。もちろん、厳密には定義に合致しなくても、あるいは在任期間外であっても、本論文の趣旨に照らして参照すべき作品はある。それらは、質的な分析をする次項（中編・後編）で補足的に扱う。

まず、もっとも基本的な作業として、鳩山首相の在任期間中（2009年9月16日～2010年6月8日）、各4コマ漫画がどのくらいの頻度（割合のこと、以後「頻度」で統一。小数点以下第3桁は切り捨て）と本数で首相を登場させたかを調べたところ、表1のような結果が得られた。表2は、鳩山とそ

表1 鳩山首相を描いた作品の頻度と本数（漫画別）

「アサッテ君」（東海林さだお）	『毎日新聞』（朝刊）	2.70%（259本中7本）
「ウチの場合は」（森下裕美）	『毎日新聞』（夕刊）	0.00%（209本中0本）
「コボちゃん」（植田まさし）	『読売新聞』（朝刊）	0.00%（259本中0本）
「ののちゃん」（いしいひさいち）	『朝日新聞』（朝刊）	0.61%（163本中1本）*
「地球防衛家のヒトビト」（しりあがり寿）	『朝日新聞』（夕刊）	5.31%（207本中11本）
合 計		1.73%（1,097本中19本）

* 「ののちゃん」の作品総数が少ないのは、作者の病气療養のため、2009年11月21日号（No. 4882）の作品を掲載後、2010年2月いっぱいまで休載したためである。再開したのは同年3月1日号からであった。¹⁰

表2 小泉から鳩山までの首相を描いた作品の頻度と本数 (漫画別)

	小泉*	安倍	福田	麻生	鳩山
「アサッテ君」	0.87% (1,825本中16本)	2.37% (337本中8本)	0.59% (335本中2本)	2.38% (335本中8本)	2.70% (259本中7本)
「ウチの場合は」	0.00% (1,318本中0本)	0.40% (245本中1本)	0.00% (280本中0本)	0.00% (275本中0本)	0.00% (209本中0本)
「コボちゃん」	0.05% (1,922本中1本)	0.00% (356本中0本)	0.28% (355本中1本)	0.00% (347本中0本)	0.00% (259本中0本)
「ののちゃん」	0.20% (1,927本中4本)	0.00% (354本中0本)	0.00% (355本中0本)	0.00% (348本中0本)	0.61% (163本中1本)
「地球防衛家のヒトビト」	3.10% (1,320本中41本)	3.72% (295本中11本)	2.72% (294本中8本)	4.86% (288本中14本)	5.31% (207本中11本)

* 小泉はこれら5つの漫画以外にも、「まっぴら君」(『毎日新聞』夕刊)、「サンワリ君」(『読売新聞』夕刊)、「ワガハイ」(『朝日新聞』夕刊)で描かれている。作品の詳細な分析は先行研究(後注3参照)がおこなっている。

れ以前の首相を比較するために、表1と先行研究の数値を統合したものである。

3大紙の4コマ漫画の全体的な特徴として、表1と表2から少なくとも3つの重要な点を指摘することができる。それらの諸点は先行研究が示している知見と根本的な部分において重複するが、鳩山の在任期間中にとくに顕著に見られる特徴もある。

第1に、先行研究がくり返し指摘しているように、首相を描く漫画と描かない漫画との間に大きなへだたりがある。小泉から麻生までの自民党の4人の首相は、時事性が強い「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」では一定の頻度・本数で描かれていた。対照的に、家庭色が強い「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」ではほとんど描かれていなかった。この特徴は、民主党の鳩山が首相に就任してからまったく変わっていない。先行研究が見いだした「時事的4コマ漫画」と「家庭的4コマ漫画」の間にある大きな差異は、歴史的といえる総選挙による政権交代をもってしても、いささかも縮まらなかった。

しかし第2に、家庭色が強い3つの漫画のなかで「ののちゃん」(2010年4月21日号、No. 4533)だけに描かれている点で、鳩山は自民党の4人の首相とやや異なる。

まず、「ののちゃん」に首相が登場したこと自体、きわめてめずらしい。これは、2005年9月12日号の作品(番外作品)で小泉が描かれて以来、実に4年7ヵ月ぶりのことである。その間、安倍・福田・麻生の3人は、「ののちゃん」では1度も取りあげられていない。わずか1本ではあるが、長い潜伏期間を経て「ののちゃん」が首相を描いた事実は、それだけで注目に値する。当該作品の分析は、本論文の後編でおこなう予定である。¹¹

加えて、鳩山は「ウチの場合は」と「コボちゃん」で描かれる機会が1度もなく、つまり家庭的4コマ漫画では「ののちゃん」でしか取りあげられておらず、この点でも他の首相とやや相違している。まず、小泉・安倍・福田の3人は、「ウチの場合は」か「コボちゃん」のいずれかに1本ずつ登場している。小泉は「コボちゃん」の1本、安倍は「ウチの場合は」の1本、福田は「コボちゃん」の1本でそれぞれ扱われている。麻生だけはどちらの漫画にも描かれておらず、この点だけを見れば

表3 家庭的4コマ漫画（「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」）における首相を描いた作品の頻度（首相別）

小泉	安倍	福田	麻生	鳩山
0.09%	0.10%	0.10%	0.00%	0.15%

鳩山と同じであるが、麻生は「ののちゃん」でも描かれておらず、この点で鳩山と食い違う。

ただし、「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」の3つの家庭的4コマ漫画において首相の存在感がきわめて希薄であることは、既述のとおり小泉から鳩山まで一貫して見られる特徴であり、上述の点はいくまでその共通の土壌に根ざした相対的に軽微な差異だといえる。「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」を合計した登場頻度を首相別にまとめた表3を見ると、小泉＝0.09%、安倍＝0.10%、福田＝0.10%、麻生＝0.00%であり、鳩山の0.15%が突出して高いとはいえない。鳩山が「ののちゃん」だけに描かれたことは確かに刮目すべき事実である。しかし、だからといって、「ののちゃん」を含む家庭的4コマ漫画が他の首相と比較して鳩山をとくに頻繁に描いたわけではない。

第3に、もっとも特筆すべき特徴として、3大紙の4コマ漫画全体でいえば、自民党の4人の前任者たちと比べ民主党の鳩山はもっとも「描かれやすい」首相であった。在任期間が異なるため頻度のみを比較すると、小泉＝0.83%、安倍＝1.26%、福田＝0.67%、麻生＝1.38%に対し、鳩山＝1.73%は最高値である。頻度を基準に「描かれやすさ」を順位づけると、鳩山（1.73%）＞麻生（1.38%）＞安倍（1.26%）＞小泉（0.83%）＞福田（0.67%）となる。この結果だけを見ても、政権交代という歴史的な出来事が首相の描かれる機会を増加させた1つの要因であったと推察することができる。

さらにいえば、鳩山を描いた作品の圧倒的多数（19本中18本）が時事的4コマ漫画である「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」で占められる事実も、政権交代が首相の登場頻度を高めたという推論を補強してくれる。いずれも現実社会の動きを積極的に作品に取り入れる漫画であるため、政権交代という希有な政治的変革が首相の登場頻度を高めたと考えられるからである。実際、上述した5人の首相の「描かれやすさ」の順位は、表4が示すように、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」のそれと完全に一致する。いずれの漫画でも、鳩山の数値は他の誰よりも高く、後続の順序も麻生＞安倍＞小泉＞福田で同一である。

もちろん、政権交代をなし遂げたという一事だけで鳩山の登場頻度の高さを説明し切れるわけでは

表4 時事的4コマ漫画（「アサッテ君」・「地球防衛家のヒトビト」）における首相を描いた作品の頻度（首相別、左から高い順）

	鳩山	麻生	安倍	小泉	福田
「アサッテ君」	2.70%	2.38%	2.37%	0.87%	0.59%
「地球防衛家のヒトビト」	5.31%	4.86%	3.72%	3.10%	2.72%

表5 鳩山首相を描いた作品の頻度と本数 (新聞別)

『毎日新聞』	1.49% (468本中7本)
『読売新聞』	0.00% (259本中0本)
『朝日新聞』	3.24% (370本中12本)

表6 鳩山首相を描いた作品の頻度と本数 (朝・夕刊別)

朝刊	1.17% (681本中8本)
夕刊	2.64% (416本中11本)

ないし、「描かれやすさ」の解明には作品の質的分析が欠かせない。したがって、頻度を基準とした鳩山の「描かれやすさ」については、内閣支持率との関係进行分析の際にもあらためて詳しく論じるし、さらに中編・後編で質的分析をする際にも折に触れて言及する。

次に、鳩山のデータを新聞別、朝・夕刊別に集計したところ、表5と表6のような結果が得られた。

これらの結果も先行研究のそれと本質的に同じで、新聞別では頻度の高い順に『朝日新聞』>『毎日新聞』>『読売新聞』(『読売新聞』は0%)、また朝刊よりも夕刊の漫画がより頻繁に首相を描いている。この順位は小泉首相以降、まったく変わっていない。ただし、前述のとおり、首相を描いている作品は時事的な性格が強い「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」に集中しているため、新聞別、朝・夕刊別による差はいずれも両漫画の数値に大きく影響されている。新聞別、朝・夕刊別の比較だけを見て解釈を加えることには慎重にならざるをえない。したがって、異なる漫画を横断的にまとめて全体的な傾向を把握する一方で、漫画ごとにその特質や傾向を詳しく検討することが重要となる。本論文が質的分析に軸を置くのはそのためである。また、鳩山の在任期間中、『読売新聞』の夕刊社会面には4コマ漫画が連載されていないことにも留意しておくべきである。

次に、首相を描いた作品数と内閣の平均支持率を、在任期間を前半と後半にわけて比較したところ、表7のような結果が得られた。2009年9月から翌年6月までが在任期間であるため、前半は2009年9月から翌年1月まで、後半は2010年2月から同年6月までとした。

支持率が比較的に高い前半(57.6%)が9本、低い後半(28.4%)が10本とほぼ均等に割れており、支持率の高低には大きく左右されず平均的に描かれていることがわかる。劇的な政権交代は鳩山の「描かれやすさ」を押しあげた有力な要因だと考えられる。しかし、前半ばかりに集中して描かれ

表7 鳩山首相を描いた作品数と内閣の平均支持率*

	本数	平均支持率
前半(2009年9月~2010年1月)	9本	57.6%
後半(2010年2月~2010年6月)	10本	28.4%

* 前半・後半の平均支持率は、表8の月別の支持率から算出した。

ているわけではない点からもわかるように、政権交代という単独の要因だけで「描かれやすさ」を説明し尽くせるものではない。あらためて後述するが、在任期間を通じて平均的な間隔で描かれている事実にも目をむける必要がある。

なお、上述の結果を先行研究のそれと比較すると、他のいずれの首相とも差異・共通点が見られるが、全体的に見れば、描かれる時期に偏りがあった小泉・安倍・福田よりも、大きな偏りなく均等に描かれた麻生に近いことがわかる。

まず、小泉はまれに見る高支持率を維持した就任初年にもっとも多く描かれたが、この特徴は鳩山にはさほどあてはまらない。総選挙での大勝で政権交代を実現し、政権発足時に70%を超える高支持率を獲得したことを考えれば（表8を参照）、鳩山こそ前半に集中して描かれても不思議ではなかった。しかし、現実にはそうはならなかった。ただし、支持率が好調だった前半に描かれることが少なかったわけではない。なお、小泉は就任の翌年以降も一定数の作品で描かれつづけており、在任期間の長さで7倍以上の開き（小泉は2001年4月26日～2006年9月26日＝1,980日）があるものの、この点では平均的に描かれた鳩山と類似性がないわけではない。

安倍と福田の場合、支持率が低下した後半の本数が前半のそれを大きく上回っており、この点で鳩山とはっきり異なる。安倍と福田は突然の辞任表明後に描かれる機会が急増しているが、この特徴も鳩山には見られない。ただし、鳩山が後半に少なく描かれたというわけではけっしてないし、安倍・福田と共通する点として、突如として辞意を明らかにしたこと、辞任を題材にした作品が複数あること（「地球防衛家のヒトビト」の2本、内容は後編で詳説）にも留意すべきである。

他方、麻生は支持率が比較的に高い前半にやや多く描かれているがその差はわずかで（前半＝12本、後半＝10本）、本質的にもっとも鳩山に近い。先行研究が指摘しているように、「麻生は在任期間中を通じて偏りなく分散して」描かれており、鳩山にもこれと同じ特徴が認められる。

あえて大まかに分類すれば、どちらかといえば前半型の小泉に対し、安倍と福田は明らかに後半型、そして麻生と鳩山は起伏の少ない安定分散型と特徴づけられる。

鳩山の「描かれやすさ」と内閣支持率の関係をより詳しく分析するために作品数と支持率を月ごとに集計しても、基本的に同じ知見が得られる。表8がその結果である。

首相に就任以来、支持率が低下しつづけるなか比較的にまんべんなく描かれている点で、やはり麻生との類似性が目につく。小泉以降、鳩山がもっとも「描かれやすい」首相であったことはすでにのべたが、その背景として、在任期間を通じて極端な偏りなく、平均的・継続的に描かれている点を理解しておく必要がある。もちろん、同じことは、鳩山について「描かれやすい」、つまり自民党の4人の前任者たちのなかでもっとも「描かれやすい」首相であった麻生についてもいえる。

加えて、表8からは、鳩山が「描かれやすさ」で他の首相をしのいだ本質的な理由について、政権交代以外の有力な具体的要因を見いだすことができる。それは、内閣支持率に代表される社会的評価が低下する度合、つまり「落差」の大きさである。

「落差」に鍵が隠されていることは、鳩山について頻繁に描かれた麻生と比較すると理解しやす

表8 鳩山首相を描いた作品数と内閣の平均支持率 (月別) *

	支持率	合計	「アサッテ君」	「ののちゃん」	「地球防衛家のヒトビト」
2009年 9月	71%	1	0	0	1
10月	65%	1	0	0	1
11月	62%	4	1	0	3
12月	48%	2	0	0	2
2010年 1月	42%	1	1	0	0
2月	39%	1	0	0	1
3月	32%	0	0	0	0
4月	25%	3	1	1	1
5月	19%	3	3	0	0
6月	27%†	3	1	0	2

* 内閣の月別の支持率は朝日新聞社の世論調査から算出した。同じ月に2回の調査がおこなわれている2010年2月と5月は、その平均値を算出した。

†2010年6月の支持率は、調査が実施された6月2～3日時点で連立して内閣を運営していた民主党と国民新党の政党支持率、それぞれ27%と0%（「あなたはいま、どの政党を支持していますか」という質問に対して「民主党」・「国民新党」と回答した割合）を合計した数値をあてた。この緊急世論調査は、同月2日に鳩山が突如として辞任を表明したことを受け実施されたため、鳩山内閣の支持・不支持を問う質問がなかった。

い。鳩山と麻生は、内閣支持率の推移の仕方が実によく似ている。両者とも、就任当初に最高値（鳩山=71%、麻生=48%）を記録し、その後は辞任までほぼ一貫して下降しつづけている。しかし、その意味はけっして同一ではない。麻生は、そもそも高いとはいえない支持率を徐々に失い、最終的に14%（2009年2月の平均値）まで低迷した。これに対し鳩山は、71%という高支持率（内閣発足時の支持率としては小泉に次ぐ歴代2位）で好調な船出をしながら、麻生よりもさらに短期間のうちに、最後は20%を切る（最低支持率は2010年5月末の緊急世論調査での17%）まで大幅に落ち込んでいる。つまり、当初からさほど期待されず低空で下降したまま終わった麻生に対して、鳩山は大きな期待を集めて華々しく登場したものの、それに応えられず看板倒れのような形で首相の座から降りたのである。同じ安定分散型ではあるが、鳩山のほうが社会的評価の低下の「落差」が激しかった分だけ、麻生よりもさらに「描かれやすい」首相になったと考えられる。¹²

その「落差」の大きさは、政権交代そのものに対する社会的評価にもある程度は反映されていると考えられる。NHKが実施した世論調査によれば、鳩山の首相就任から約2ヵ月半後（2009年11月～12月）の時点では3人に1人が日本の政治は「良くなった」（4%）、「どちらかといえば良くなった」（29%）と肯定的に答えていた。ところが、鳩山の辞職後、2010年9月の調査では、その割合はほぼ5人に1人（「良くなった」=2%、「どちらかといえば良くなった」=20%）に減っている。他方、「悪くなった」「どちらかといえば悪くなった」と否定的な評価をしたのは、2009年ではそれぞれ3%と9%だったのが、2010年には5%と15%へと増えている。いずれの調査でも過半数は「変わら

ない」と答えているものの（2009年＝54%、2010年＝58%）、鳩山内閣に対する評価と同じように、政権交代に対する社会的評価もより厳しくなっていることがわかる。¹³

鳩山の「描かれやすさ」について考察をさらにすすめれば、先行研究が示した仮説——首相が描かれる多寡に影響を与えるのは支持率の数字そのものよりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである——は、ここでも十分な妥当性を発揮している。上述のとおり、衆議院総選挙で自民党を破り念願の政権交代をはたした鳩山は、就任当初は国民の期待を集めていた。ところが、自身の献金疑惑や沖縄県のアメリカ軍飛行場の移設問題などで大きくつまずき、批判をあびた末、わずか8ヵ月強で辞任してしまった。ほぼ1年ごとに交代をくり返した安倍・福田・麻生よりもさらに早い退場であり、現行の憲法下では6番目の短命政権であった。支持率の高さ・低さそれ自体よりも、劇的な登場とその後の急降下、その締めくくりとしてのあっけない幕切れという一連の流れが社会的議論を喚起し、かつマス・メディアでも大きく報道され、社会的評価の「落差」や政権交代に対する評価を含めたそれらの総体が「描かれやすさ」につながったと考えるのが合理的であろう。

詳細は質的分析にゆずるが、個別の作品の内容を見ても、上述の仮説の妥当性は揺るがない。鳩山が描かれた作品の題材を見ると、強い批判を受けた献金疑惑とアメリカ軍の普天間飛行場の移設問題、そして賛否両論あった辞任の決断が目立つ。確かに、どの問題も支持率の低下と無関係ではない。しかし、それらが支持率を一定水準まで下げたから首相が作品化されたというよりは、強い追い風を受けて登場した新首相が早々に失速したことが問題視され、そのことに対する社会的注目が4コマ漫画の作品につながったと考えるほうが自然である。

以上の考察を総合すると、政権交代による華々しい登場、それとは対照的に難航した政権運営と早期の退場、「落差」の大きいその社会的評価の竜頭蛇尾ぶりこそが鳩山の「描かれやすさ」の本質であったと考えられる。鳩山の首相就任が総選挙で事実上確定する以前、『朝日新聞』で風刺漫画を描いていたやくみつるは、「民主党代表の鳩山由紀夫さんよりは、麻生太郎さんにこのまま続けてもらった方が漫画を描くにはありがたい」とコメントしている。漫画の題材にしやすいような不評を買う言動を麻生がくり返していたからである。しかし、いざ首相が交代してみると、麻生以上に振幅の激しい政権運営を強いられた鳩山のほうが、描き手にとってはより「ありがたい」存在となったといえる。¹⁴

もっとも、社会的注目度を重視する上述の仮説では説明しきれない点もあり、さらなる研究による一般化の努力は今後も継続せねばならない。たとえば、民主党政権が誕生したことそれ自体や、その結果として実現した「事業仕分け」や「子ども手当」などは大きな話題となり、実際に少なくない作品で題材とされているが、そのなかで首相を描いた作品は1本もなかった。また、先行研究も指摘しているように、仮説は時事的な「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」にはうまくあてはまっても、家庭的な漫画とは必ずしも同程度に適合しない。既述のとおり、鳩山はもっとも「描かれやすい」首相であったものの、家庭的な漫画では「ののちゃん」だけ、しかもわずか1本にしか登場していないからである。その作品にしても、題材は首相と小沢一郎・民主党幹事長との力関係であり、時事漫画で多く扱われた献金疑惑やアメリカ軍飛行場問題ではない。ただし、小沢幹事長との関係は、

表9 鳩山首相を示すシンボル (漫画別)

	画像のみ	文字のみ	画像と文字 (併用)
「アサッテ君」	5本	1本	1本
「ウチの場合は」	0本	0本	0本
「コボちゃん」	0本	0本	0本
「ののちゃん」	0本	0本	1本
「地球防衛家のヒトビト」	6本	2本	3本
合計	11本	3本	5本

表10 各シンボルの合計値 (首相別)

	画像のみ	文字のみ	画像と文字 (併用)
小泉	27本	39本	14本
安倍	8本	5本	7本
福田	3本	3本	5本
麻生	7本	5本	10本
鳩山	11本	3本	5本
合計	56本	55本	41本

鳩山が首相に就任する以前から広く報道されていた問題であり、かつ「アサッテ君」でも1本の作品で取りあげられており、仮説にあてはまる側面もある。いずれにせよ、首相の「描かれやすさ」と内閣支持率や社会的注目度との関係の理論化が、量的・質的の両面から、いまだ説明すべき余地の多い課題であることは間違いない。

最後に、鳩山首相を示すシンボル (画像・文字・画像と文字) を漫画ごとに分類し集計したのが表9、各シンボルの合計値を他の首相のそれと比べたのが表10である。

一見して、鳩山を描いた作品では画像が多用されていることがわかる。「画像のみ」(11本) が全体の過半数を占めているのは鳩山だけであり、この意味でも鳩山が文字どおり「描かれやすい」首相であったことがわかる。

先行研究も指摘しているように、漫画という表現形態を考えれば、画像の使用が文字を上回ることで自体に不自然さはないが、その傾向は鳩山にとくに明瞭にあらわれている。安倍が突然に辞意を表明した直後、「地球防衛家のヒトビト」の作者・しりあがり寿は、作品中 (2007年9月15日号) に自身とおぼしき「某漫画家」を登場させ、次は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と語らせている。実証的に突きとめることは難しいが、漫画家にとって鳩山にとくに「似顔絵の描きやすい首相」でもあった可能性は十分にある。¹⁵

しかし、かといって文字の使用が極端に少ないとはいえ、新聞4コマ漫画のシンボル使用についてはいまだ手堅い知見を見だしにくいのが現状である。鳩山を文字だけで描いた作品は3本である

が、文字と画像を併用している5本を足せば、8本の作品で文字が使われている。けっして文字の役割が軽いわけではない。

また、鳩山にはあてはめにくいものの、先行研究が指摘しているように、4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくいいため文字により説明的に首相を描く必要性が高まる、という考え方も依然として説得性を保持している。実際、小泉から鳩山までの数値を合計すれば、表10が示すように、画像と文字はほぼ同数の作品（画像のみ=56本、文字のみ=55本、併用=41本）で使われている。前述のとおり、漫画であるがゆえ画像が多用されても何ら不思議ではないが、同時に4コマ漫画だからこそ他の形態の漫画に比べ文字が大きな役割をはたしているともいえるのである。いずれにせよ、容姿など外見的・身体的な描きやすさも含め、シンボル使用についてより蓋然性の高い知見を得るには追加的な研究を要する。

- 1 茨木正治『メディアのなかのマンガ 新聞一コママンガの世界』（臨川書店、2007年）、16。
- 2 新聞漫画を含め、アメリカ・ジャーナリズム史を要領よく概説した研究書として、Edwin Emery and Michael Emery with Nancy L. Roberts, *The Press and America: An Interpretive History of the Mass Media* 9th ed., (Needham Heights, MA: Allyn and Bacon, 2000) がある。日本における新聞漫画の歴史を概説した主要な文献としては、川崎市市民ミュージアム編『日本の漫画300年』（川崎市市民ミュージアム、1996年）、清水勲『図解 漫画の歴史』（河出書房新社、1999年）、ニュースパーク（日本新聞博物館）編・春原昭彦監修『新聞漫画の眼 人 政治 社会』（ニュースパーク、2003年）、清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、などがある。
- 3 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、180。新聞4コマ漫画の政治的内容を学術的な方法で検討した数少ない先行研究として、小泉純一郎、安倍晋三・福田康夫、および麻生太郎首相を事例とした一連の論文がある。

小泉に関する論文は、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（前編）」『情報研究』第37号（2007年7月）：47～84、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（後編）」『情報研究』第38号（2008年1月）：23～58、である。なお、水野剛也「漫画のなかの小泉純一郎首相 首相在任期間中の『朝日新聞』4コマ漫画を中心として」『朝日総研レポート（AIR21）』第206号（2007年7月）：16～53は、上述の論文から『朝日新聞』の4コマ漫画の分析部分を抜粋したダイジェスト版である。

安倍・福田に関する論文は、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（前編）両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第1号（2010年1月）：5～13、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（中編）両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第2号（2010年3月）：21～34、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（後編）両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第48巻・第1号（2010年12月）：61～78、である。

麻生に関する論文は、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（前編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第48巻・第2号（2011年3月）：19～28、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（中編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第49巻・第1号（2012年1月）：57～81、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（後編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第49巻・第2号（2012年3月）：59～83、である。

- 4 鳩山首相は2010年6月2日に辞意を表明し、同月4日には菅直人が衆参両議院で第94代首相に指名されている。しかし、菅が天皇による認証式を受け、正式に内閣を発足させたのは6月8日であった。このため、鳩山

内閣は6月4日から8日まで「職務執行内閣」としてとどまった。結局、266日で終わった鳩山内閣は、現行の憲法下では6番目の短命政権であった。

- 5 Todd Gitlin, *The Whole World is Watching: Mass Media in the Making and Unmaking of the New Left* (Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, 1980), 7. フレーム概念を政治漫画分析に関連づけて概説した先行研究として、茨木正治『「政治漫画」の政治分析』(芦書房、1997年)、茨木正治「政治漫画に見る内閣 選挙報道における森喜朗内閣と小泉純一郎内閣」『北陸法學』第9巻・第2号(2001年): 29~50、などがある。ニュースのフレームについては、Gaye Tuchman, *Making News: A Study in the Construction of Reality* (New York: Free Press, 1978) なども参考になる。
- 6 藤森照信「今週の本棚 紙面左上に君臨する『政権』の起承転結」『毎日新聞』2009年11月15日。もちろん、新聞の1コマ漫画はまさに政治・政治家を批評・風刺することを主目的としており、それゆえに先行研究が1コマ漫画を優先してきたことには十分な根拠がある。
- 7 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』(ミネルヴァ書房、2009年)、8。新聞4コマ漫画を質的に分析している文献として、次のようなものがある。高坂文雄『笑う戦後史』(トランスビュー、2002年)、岩本茂樹『戦後アメリカニゼーションの原風景 『ブロンディ』と投影されたアメリカ像』(ハーベスト社、2002年)、岩本茂樹『憧れのブロンディ 戦後日本のアメリカニゼーション』(新曜社、2007年)、岩本茂樹『アメリカ漫画『ブロンディ』へのまなざし 『夫の家事労働』をめぐって』『メディア・コミュニケーション』第58号(2008年3月): 43~53。
- 8 長谷川町子の「サザエさん」は、1946年4月に『夕刊フクニチ』で連載を開始し、『新夕刊』を経て1949年12月から『朝日新聞』(夕刊)、1951年4月から1974年2月まで『朝日新聞』(朝刊)で連載された4コマ漫画であるが、新聞にとどまらず、映画・ラジオ・アニメ・テレビドラマなど、さまざまなメディアを通して広く親しまれた。そのためか、「サザエさん」を論じた文献は他の漫画のそれに比べて格段に多い。主要な文献として、次のようなものがある。東京サザエさん学会編『磯野家の謎』(飛鳥新社、1992年)、樋口恵子『サザエさんからいじわるばあさんへ 女・子どもの生活史』(ドメス出版、1993年)、新藤謙『サザエさんとその時代』(晩聲社、1996年)、清水勲『サザエさんの正体』(平凡社、1997年)、清水勲『古きよきサザエさんの世界』(いそっぷ社、2002年)、朝日新聞be編集部編『サザエさんをさがして』(朝日新聞社、2005年)、朝日新聞be編集グループ編『サザエさんをさがして その2』(朝日新聞社、2006年)、鶴見俊輔・齋藤慎爾編『サザエさんの〈昭和〉』(柏書房、2006年)、朝日新聞be編集グループ編『またまたサザエさんをさがして』(朝日新聞社、2007年)、朝日新聞be編集グループ編『サザエさんパンダを見に行く サザエさんをさがしてその4』(朝日新聞社、2009年)、朝日新聞be編集グループ編『原っぱで夕焼けを見ていた頃 サザエさんをさがして その5』(朝日新聞社、2010年)。
- 9 フェルドマン・オフェル「政治マンガに見る『日本の首相』」『潮』1993年12月号: 120、茨木『「政治漫画」の政治分析』190、金澤宏明「史料としての合衆国の政治カートゥーン アメリカ対外関係史研究と画像分析」『アメリカ史研究』第32号(2009年): 126。
- 10 「『ののちゃん』しばらく休みます」『朝日新聞』2009年11月21日、いしいひさいち「読者のみなさんへ」『朝日新聞』2010年2月22日。
- 11 小泉の在任期間中、「ののちゃん」は0.20% (1,927本中4本)の作品で首相を描いていた。ただし、その4本中、2本は作品番号が記されていない「番外作品」であった。小泉を最後に描いた2005年9月12日号の作品もその1つである。鳩山を描いた1本は、番号が記された通常の作品である。これらの点については、本論文の後編で質的内容分析をする際にあらためて論じる。
- 12 参考までに、就任当初の支持率が比較的に高く、その後、徐々に低下するという傾向それ自体は小泉・安倍・福田にも共通して見られるが、鳩山の「落差」はいずれの前任者のそれよりも大きい。朝日新聞社の世論調査では、小泉は最高=84%、最低=33%、安倍は最高=63%、最低=26%、福田は最高=53%、最低=19%、麻生は最高=48%、最低=13%である。
- 13 河野啓・関谷道雄「政権交代1年の評価 『政治と社会に関する意識・2010』調査から」『放送研究と調査』2011年1月号: 2~29。
- 14 やくみつる「こんな自民に誰がした 資質落ち政治ネタ『バブル』」『朝日新聞』2009年7月19日。
- 15 「地球防衛家のヒトビト」の2007年9月15日号の作品分析は、後注3で示した水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相(後編)」でおこなっている。

【Abstract】

Prime Minister Yukio Hatoyama in Newspaper Comic Strips (Part 1): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2009–2010

Takeya MIZUNO and Tomomi FUKUDA

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yukio Hatoyama during his tenure, from September 16, 2009 to June 8, 2010.

As the first installment of a three-part series, this article (Part 1) explains the purpose, method, and significance of the research, and then highlights quantitative findings.

The second and third installments (Parts 2 and 3) will appear in upcoming issues, in which comic strips of *Mainichi*, *Yomiuri* and *Asahi* will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.